毎日俳壇

片山由美子 選

春灯を消すや雨音深まりぬ　日高市　落合　清子

〈評〉雨はずっと降り続いていたのだが、灯を消すことによって聴覚が敏感になったことが分かる。春の夜の趣が背景にある。

雨樋をはしる雨音夏に入る　奈良市　伊東　勝

〈評〉雨の音にも季節感がある。勢いよくといを流れる雨は高らかに夏の到来を告げるかのよう。

呼び水に野井戸の応ふ麦の秋　加古川市　中村　立身

人の住む気配もなくて薔薇館　宇治市　福井　貞子

初夏の水平線の船数ふ　磐田市　大石　志づ

山女釣る谷のしづけさ昼長し　前橋市　西村　晃

春愁や返し縫ひめく老いの日々　東京　石橋万喜子

すしめしに布巾ふんはり花菜風　和歌山市　曽根　澄子

源流は県境あたり出水川　津山市　森下　弘

かさぶたをきれいに剝がす夏隣　東京　嶋村　純

小川　軽舟 選

出来たての酸素の香り草若葉　秋田市　鈴木華奈子

〈評〉若葉が光合成をして新鮮な酸素で外気を満たす。それを胸いっぱい吸い込む作者も生まれ変わった気分だろう。

夕薄暑ワンオンワンのバッシュ鳴る　下野市　石井　光

〈評〉バスケットボールの機敏な動きがそのまま一句をなしたような切れ味のよい句だ。

島巡る自転車の医師風光る　仙台市　鎌田　傑

音立てず大蟻歩く畳かな　平塚市　藤森　弘上

明易や東をみて西をみて　大野城市　野分　のわ

初夏や卓布真白き洋食屋　中間市　黒石みずほ

新緑やふるさとの山深呼吸　柏　市　小畑　昌司

アパートの窓に小さきこいのぼり　太田市　服部千鶴子

十階の病室にまで遠蛙　富士見市　田中　芳二

革製のブックカバーや桜桃忌　東京　小峯　和弘

西村　和子 選

万緑や歩荷の太き脹脛　東久留米市　矢作　輝

〈評〉山を歩いて重い荷物や物資を運ぶ人のふくらはぎに焦点を絞り、頼もしさを描写。いよいよ登山の季節を迎える興奮も伝わる。

雨に来てむらさき清き菖蒲園　千葉市　高橋　信子

〈評〉雨に清められたハナショウブの紫が、ひときわ鮮やか。まさに、俳人にあいにくはない。

ピクルスの咀嚼軽快夏来る　大阪市　すずしろゆき

言の葉に優る泣き声島の夏　島田市　久根　純司

風通しよく金魚売る日陰かな　東大阪市　志賀　克毅

日除していよよ奥まり古書店主　東京　望月　清彦

揺り椅子に雨の音聞く五月かな　春日市　林田　久子

レモネード妻とわけあふ立夏かな　山形　佐藤美和緒

熊蜂の高き羽音に追はれけり　横浜市　相沢恵美子

花の塵掃き寄せ露店たたみけり　西海市　まえだいっそう

井上　康明 選

あめんぼうバケツの空を飛びだせり　大阪　芹澤　由美

〈評〉あめんぼを水の入ったバケツに入れておいたのだろう。水に映る空の上を勢いよく走り回り、ついに飛び出したのである。

友がゐて師がゐて不惑雲の峰　川越市　岡部　申之

〈評〉作者は不惑40歳。友人と師のいる今の、未来への思いを、峰のような夏雲に託している。

兜虫肩に凱旋次男坊　浜松市　久野　茂樹

父の日や書棚の隅のピース缶　東京　徳原　伸吉

退院の自動ドアーや風薫る　福知山市　森井　敏行

冷酒の喉を過ぎたる辺りかな　東京　島田　金盥

悪友の誰彼想ひ草矢打つ　神奈川　中島やさか

ぜんざいに塩ひとつかみ走り梅雨　津　市　秋山　歩荷

花王なる牡丹に憑かれたかしの忌　越谷市　安居院半樹

面会の友の笑顔や麦こがし　直方市　岩野　伸子

詠む広場

水原　紫苑 選

うたをよむことはしんだひびのことおもいかえしてまたわすれさること　横浜市　大原　香花

〈評〉「一度も死んだことなきみらしと

伊藤　一彦 選

ほそ長き厨の奥に白き影そば屋のあるじ遅き昼を食む　北広島市　富丘　治生

〈評〉暗闇のなかで、その確かさを汚

米川千嘉子 選

卵持ちて生まれし事もキュンとした痛みも忘れて女子会始まる　三　重　中山由賀子

〈評〉排卵のことをその前後の痛みも表く

加藤　治郎 選

シャツの袖を少しまくって皿を洗う　いつか必ず朽ちる両手で　名古屋市　森本　有

〈評〉スケッチがよい。帰宅後でまだ着替

うたは奏でる

恋という限定　染野太朗

昨年の9月、作家のくどうれいんさんとの共著『恋のすべて』（扶桑社）が出版された。雑誌『Numéro TOKYO』での連載に新作を加えた、恋がテーマの短歌集だ。共著とはいえ自分の本についてこの欄で語るのは気恥ずかしく今まで書けなかった。遅くなったが書こうと思う。

短歌専門誌でなくファッションやカルチャーを扱う媒体で連載すること、くどうさんと私の歌が洗練されたデザインのカラーページに毎号印刷されること、2人を恋人同士に見立てるのではなく、個々に詠み、その上でそれぞれの連作をフィクショナルな短編映画のように仕上げることなど、私には何もかもが刺激的な創作だった。本として一冊にまとめるにあたっても、編集者、デザイナー、くどうさんと私、その他たくさんの人がチームとなって皆で細かくアイデアを出し合い、時間をかけて作り上げた。帯文にはなんと俵万智さんのコメントが届いた。その帯も含めて反響は大きかった。

連載をとおしてくどうさんの歌の魅力に改めて気づけたのも大きな喜びだった。たとえば次のような歌。

・あなたからまばたきが来る風になり羽になりこの胸に来る　好き

・イルカショー（どうしてもしも別れたらといま考えた？）咲くように水

・スプーンのひかりはささやかな傷の重なり　桃のつめたいスープ

映像化された高揚感、あざやかな場面構成と比喩、細部へのまなざしと甘やかな痛み。ここに現れたのはテーマを恋に限定したからこその詩性だろう。いかにもまぶしい。（そめの・たろう＝歌人）

こちらから投稿できます

dan/）

複数の
指を変は
選作は一
べ
す。